

図書紹介

Peter J. Wilson. *A Malay Village and Malaysia—Social values and rural development*. New Haven: HRAF Press, 1967. 171p.

本書は、著者 P.J. Wilson が、HRAF (Human Relations Area Files) の援助で行なった調査の報告書で、HRAF Press からペーパーバックで出されている。サブタイトルからも想像できるように、マレー半島における一つのマレー人村落に着目し、住民の価値観の分析を通して、村落開発の問題点を、どちらかと言えば一般読者を対象として論じている。

調査地は、Selangor 州のゴム栽培を主業とするマレー人農村 Jendram Hilir で、著者はこれを西海岸ゴム栽培地域における典型的な村の一つと考えている。調査期間は、1964年9月から1965年4月までである。

Introduction, Acknowledgments に続いてはじまる本文は、Chapter 1 から Chapter 4 に至る見出しのない四つの章からなり、最後に Conclusion が書かれている。

第1章において、著者はまず多民族国家としてのマレーシアの歴史、および調査村の歴史を略述し、このような背景の中で、マレー人村民が接触する他民族、すなわち中国人、インド人がどのようにステレオタイプ化して捉えられているかを述べる。

第2章では、前章をうけて、マレー人村民と外部の社会との接触のしかたを論じ、彼らが外部の文化を知っており、ときにはそれに参与することもあるが、全体として自分自身の文化に固執していることを指摘する。

第3章は、このような態度を経済生活の中にみようとするとするものである。主生業であるゴム栽培は、本来の生業である稲作、漁労などと異なって、金を稼ぐために外部から導入されたもので、栽培に関する儀礼なども全く欠いており、労働としては低く評価されていることなどを論ずる。

第4章では、村人の外界に対する反応の基盤を形

成する村内の社会関係と村の社会生活の構造を論ずる。

そして、結論の章で、再びこのようなマレー村落における近代化のうけ入れの困難さを指摘し、それをいかに方向づけるべきかを示唆する。

以上のような構成をもつこの書物は、専門的なモノグラフとしてみるときには、重要な指摘をしばしば認めることができる反面、ほとんどが叙述に頼っており、分析の基礎となった詳しいデータが示されていないために、やや頼りなさが感じられるかもしれない。しかし、一般読者にとっては、生活の変動に直面するマレー人農民の姿を理解する上に、非常に興味深い書物である。(坪内良博)

ピア・アヌマーン・ラーチャトン著、河部利夫訳註『タイ農民の生活』アジア・アフリカ言語文化双書1；東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所刊、1967。viii+135 p.

本訳書は、88才の高齢をもって、今日なお、精力的に研究成果を発表し続けている、タイ国の碩学、Phya Anuman Rajadhon 博士の労作 *Chiwit khong Chawna*. Bangkok, 1953 の全訳である。

原著は、タイ国人口の85%以上を占める米作農民の、水稲耕作を中心とする1年間の生活のサイクルを、きわめて克明に記述したもので、タイ国農村研究者必読の文献としてつとに定評があり、1955年、Michigan 大学の William J. Gedney 教授によって英訳されている。

内容は、都会と田舎の得失を論じた第1章にはじまり、田づくり、田の犂き返し、耙(まぐわ)かけと田植え、豊作と不作、稲の出穂と結実の頃、田の動物や植物、稲刈り、脱穀、脱穀場の儀礼、その他の11章より成る。著者の執筆態度は、ひとえに記述的であって、分析はほとんど加えられていないが、水田、各種の様態、使用農具の解説、犂耕、播種、

移植、出穂、結実、収穫、脱穀、計量の実際から、稲作儀礼、水田の動植物にいたるまで、きわめて具体的かつ詳細な記述がなされており、さながら「水稻耕作百科」の観を呈している。

本訳書には、タイ国になじみの薄い読者の理解を助けるため、各章末尾に、詳細にすぎるほどの訳註と説明写真が加えられている。とくに巻末に付された62葉の参考写真は、原文はもとより、英訳にもなかったものであって、本訳書の価値を高からしめている。

これまでタイ語文献でわが国に翻訳紹介されたものは、若干の小説をのぞき、ほとんど皆無の状況であったが、アジア・アフリカ言語文化研究所の手によって、本訳書のような、タイ人学者による研究業績が全訳刊行されたことは、まことに喜ばしいことである。同研究所によって今後、アジア・アフリカ諸国語で書かれた研究書が、系統的に翻訳紹介されることを期待したい。(石井米雄)

J. Marvin Brown, ed. *AUA Language Center Thai Course*, Book 2. Bangkok: The American University Alumni Association Language Center, 1966. 131p.

先に紹介した *AUA Language Center Thai Course*, Book 1 に直接続くものである。全体で20のレッスンより成り、各レッスンに費やすべき時間数は、教室での練習2時間に L.L. での練習1時間となっている。また、L.L. を使用出来ない者は、これを省略し50時間で本書を終えてもさしつかえないように工夫されている。各レッスンは、(1) Tone Practice, (2) Expansions, (3) Patterns, (4) Dialogue, (5) Contrast Drills, (6) Tone Identification Drills, (7) Taped Drills の7部分に分かれており、(7)が L.L. での訓練に当てられるわけである。全体を通じて、各部分にはいろいろな名前がつけられてはいるが、すべてパターンによる反復練習の方法が取られている。したがって、一語一語訳してからもう1度全体の意味を考えるとというような行き方は、Book 1 および Book 2 を通じて全然見られない。前半のタイ語には訳がつけられ

ているが、それも後半になると全くなくなる。本書を終了した場合どの程度のタイ語の力を身につけたことになるかという点であるが、わたくしは本書にある文章を本当に身につけてしまえば、普通の日常の話し言葉では、まず困ることはないと思う。本書のタイ語は純粹の話し言葉ばかりであり、その話し言葉の文もすべてもれなく集められているわけではないが、まずこれだけの口語をものにしておけば、必要に応じてそれを自分で拡大増加させることはたいてい困難ではないと思う。またタイ文字の使用法については、本書の性格上、各レッスンの末に少しずつ例をあげて説明しているだけであるが、それでも Book 2 を終えれば、最少限の知識は得られるであろう。だいたい本書はタイ語の完成を目ざすものではなくて、基礎的な話し言葉を能率よく身につけさせ、その基礎の上に各人の必要なり興味なりに応じて、さらに高度の能力を積み重ねてゆくことを予想するものである。ただ本書は AUA におけるタイ語コースにおいて、AUA の方法によりタイ語を学ぶという具体的な線にそって作られたものであるから、誰がどんな方法で用いても効果が上がるというようなものではない。まず、独学は不可能であろう。本書が予想している方法を心得た指導者の下に適当なインフォーマントを使用して授業を進めれば、かなり労少なくして効果を上げることが出来るのではないかと思う。いったいに本書ではこの「労少なくして」という点が重んじられているといえる。だから、その「労少なくして」得られる以上のことを本書から予期してはアテがはずれるであろう。

(桂満希郎)

L.M. Hanks, J.R. Hanks and Lauriston Sharp. *Ethnic Notes on Northern Thailand*, Data Paper No. 58. Ithaca: Southeast Asia Program, Department of Asian Studies, Cornell University, 1965. xiii + 96 + 13p

1963年より1964年にかけて行なわれた Benington-Cornell Anthropological Survey of Northern Thailand に参加あるいは何らかの形で関係した研究者達のペーパーを集めたものである。全部で